

新 編
日本史辞典

京大日本史辞典 編纂会編

東京創元社

新編 日本史辞典

〈検印廃止〉

平成2年6月5日 発行

定価12,000円

編者 京大日本史辞典編纂会

発行所 株式会社 東京創元社

代表者 平松一郎

(162) 東京都新宿区新小川町1-5

電話03-268-8231・振替東京6-1565

印刷 旭印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

June 1990. Printed in Japan © 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-488-00302-8 C1521

序

『新編 日本史辞典』の前身とも申すべき京都大学文学部国史研究室編『日本史辞典』は昭和29年12月刊行されたが、編纂の目標として一は現代に生きる社会人として必要な日本史の教養を身につけるため適当な伴侶となり、一はやがて日本史の専門領域に進むことを志す学徒にとっても信頼できる手引となることを掲げたのである。はからずも世の好評を博して数版を重ねたが、その期待に応え不備を補うため数年を経て増補新版を刊行した。さらにまた昭和42年に改訂作業に着手したが、当時の学園をめぐる事情などもあり、この計画は中絶せざるをえなかった。しかも増補新版はその後も世の需要はおとろえず幾版をも重ねる状態であり、編纂関係者としては改訂の責任を切に感じたのである。

昭和51年暮に、京都大学文学部国史研究室の名義で行ってきた改訂作業を打切り、新たに17人より成る編纂委員会を設けて、全面的改訂を施し、『新編 日本史辞典』として刊行する企画をたてた。委員会においては、前述の辞典編纂の目標をより完全に達成する趣意に立って、編纂方針の検討や項目の選定を行い、各委員は項目の執筆を担当するとともに、項目によっては専門による最適の執筆者を選考して委嘱した。史学の進展に対応し、日本史をより広く深く理解するため、必要な項目を選定することに努めた。すなわち日本史の必須項目を精選するとともに、考古学・民俗学・国文学・美術芸能など隣接諸学より関連項目を収録し、また全時代にわたる対外関係について特に留意した。かくて執筆者数161名に達し、前書に比して数十名を増し、項目数約4800に及び、前書に対しほとんど1倍半となっている。

付録として諸種の図表・一覧表などを添える企画は、前書の発刊当時においては新機軸を出したものと称して過言でなかった。『新編 日本史辞典』においては、付録にも多く改訂を加えた。前書の建築図・名数表などは整理簡略し、原始遺物図は付録においてでなく本文項目で扱うこととした。付録の通編では女院表・仏教宗派表など、古代では日中・日朝遣使年表、中世では

中世末・近世初頭物価表など、近世では藩校表など、近代では選挙制度変遷一覧など、また付図では内裏と朝堂院の変遷図などを新たに加えている。

項目記述に、論文・著書・調査報告書など主要な参考文献を掲げたことは、前書のごとくであるが、新たに執筆者名を付記した。また索引を付したことは前書と同様であるが、詳細で利用度の高い索引作成に努めた。

『新編 日本史辞典』は前書に比し約 400 頁を増しているが、それは主として本文の増頁による。改訂作業の発足以来、すでに 10 余年を経過したが、これには種々の事情があった。この間に委員会は幾度か催され、項目の取舍、付録内容の検討、執筆者の選考など、くりかえして討議を重ねたことなどが回顧される。ここによりやく発刊の運びとなり、その成果のほどを見うることとなった。さてこの間、長期にわたって編纂に従い、また索引作成や校正にも鋭意努められた鎌形功・寺村嘉夫・左方尚子の諸氏に対し、深く感謝の微意を表するしだいである。

平成 2 年 1 月

京大日本史辞典編纂会代表

小 葉 田 淳

編纂委員一覽（五十音順）

- 朝尾直弘（京都大学教授）
熱田公（神戸大学教授）
井口和起（京都府立大学教授）
池田敬正（京都府立大学教授）
上田正昭（京都大学教授）
上横手雅敬（京都大学教授）
大山喬平（京都大学教授）
木坂順一郎（竜谷大学教授）
小葉田淳（京都大学名誉教授）
柴原永遠男（大阪市立大学助教授）
佐藤宗諄（奈良女子大学教授）
杉橋隆夫（立命館大学教授）
高取正男（元京都女子大学教授）
都出比呂志（大阪大学教授）
藤井学（京都府立大学教授）
山本四郎（神戸女子大学教授）
横山浩一（九州大学名誉教授）

執筆者一覽 (五十音順)

赤井達郎	秋宗康子	浅井良夫	朝尾直弘
飛鳥井雅道	熱田公	荒木幹雄	有泉貞夫
猪飼隆明	井口和起	池内敏	池上和夫
池田敬正	井ヶ田良治	石躍胤央	石田善人
石塚裕道	泉拓良	井筒雅風	伊藤正直
稲田孝司	稲本紀昭	井上勝生	井上満郎
今岡典和	今谷明	今西一	今堀太逸
岩井忠熊	岩崎直也	岩永省三	岩村登志夫
上田正昭	上原真人	内田九州男	馬田綾子
梅溪昇	上横手雅敬	江口圭一	大山喬平
岡田精司	小野山節久	笠谷和比古	勝山清次
門脇禎二	狩野久	鎌田元一	河手龍海
河音能平	河原純一	木坂順一郎	北川忠彦
櫛木謙周	工藤敬一	熊谷賢	倉地克直
栗原るみ	黒田達也	児玉識	後藤靖夫
小葉田淳	小林昌二	小林達雄	小林義郎
小林幸男	近藤喬一	近藤豊	近藤景雄
齐藤寿彦	酒井一	栄原永遠男	桜井景雄
佐々木隆爾	佐藤宗諄	佐原真	重森暁
柴田純己	芝原拓自	島津忠夫	清水善三
下野克己	杉井健	杉井六郎	杉橋隆夫
鈴木良彦	藺田香融	杉田善雄	平雅行人
高尾一己	高沢裕一	高取正男	武田晴人
館野和己	立松潔	田中誠二	田中真人
田中琢	棚橋光男	田辺征夫	田辺昭三
塚本明	辻本雅史	都出比呂志	戸田芳実
直木孝次郎	中島三千男	長島修	中塚明
中村哲	西山厚	野田嶺志	萩本勝

狭間直樹	橋本義則	原口正三	疋田康行
久野修義	平瀬直樹	広川禎秀	ひろたまさき
深江浩	藤井松一	藤井讓治	藤井学
藤岡大拙	藤本博生	古屋哲夫	本郷真紹
俣野好治	松尾尊兌	松尾寿	松元宏
三浦圭一	美川圭	水野章二	水本邦彦
宮城公子	宮崎隆旨	宗政五十緒	村井康彦
村田修三	元木泰雄	百田昌夫	八木充
安国良一	安丸良夫	山岡泰造	山崎彰
山崎芙紗子	山中一郎	山本明	山本四郎
横山浩一	吉田晶	吉田敏弘	脇田修
脇田晴子	和田萃	和田晴吾	渡辺武
渡部徹			

[図版協力者] (五十音順, 敬称略)

会津若松市教育委員会／飯塚市歴史資料館／大阪市文化財協会／大阪府教育委員会／開善寺／木下正史／宮内庁／京都大学人文科学研究所／東京国立博物館／長谷川虎雄／春成秀爾／東大阪市文化財協会／福知山市教育委員会／文化庁／前原町教育委員会／宗像大社

凡 例

【本文項目】

- 1 この辞典は、項目の設定にあたっては中項目主義を採用し、日本史学全般にわたる必須項目を基本に、考古学、民俗学、国文学、美術史などの隣接諸分野に及ぶ4785項目を選定した。
- 2 日本と諸外国との関係史を重んじ、日本と関わりの深い諸外国の歴史事項・人名項目を収録することにつとめた。
- 3 収録した項目は、1989年（平成1）4月までを限度とし、人名は死没者に限った。
- 4 項目の記述は、各項目の末尾に示した執筆者によるが、本辞典全体の編集は編纂委員会がおこなった。
- 5 項目の配列は五十音順による。清音・濁音・半濁音の順とし、長音・促音・拗音は音順に数えた。また、同音異字は文字の画数順とした。
- 6 検索頻度の高い別称・略称、たがいに深い関連のある項目を一つにまとめて解説したもの、他の項目に相応の解説があるもの、また項目の読み方が二通りあるものは、「見よ」項目を立て、⇒で検索すべき項目を示した。
〔例〕三浦按針 みつら せき ⇒アダムズ、 旧辞 きゅうじ ⇒帝紀・旧辞
弥生時代 やいせい ⇒弥生文化、 土一揆 どいつがい ⇒つちいっき
- 7 人名は姓（または家名）と名（または号）で示したが、平安時代末期までの人名は姓と名とのあいだに〈の〉を入れて読み、また外国人名は原則としてファミリーネームで掲げた。
- 8 外国語・外国人名のカタカナ表記は、原音に近いもので表わしたが、慣用に従ったものもある。V音はバビブボで記した。
- 9 記述の順序は原則として、1)項目名、2)読みまたは原語、3)年代（生没年や当該事項の年）、4)定義・解説、5)参照項目、6)参考文献、7)執筆者名とした。
- 10 かなづかいはいく〈現代かなづかい〉により、引用文などは〈旧かなづかい〉も用いた。漢字は新字体による。
- 11 年代表記について
 - ① 年代は、原則として西暦で示し、日本年号は（ ）内に記した。西暦表示は、便宜的に年単位でおこない、月・日まで厳密に比定したものではない。日本年号は、原則として改元の年は新年号に統一した。ただし、近代以降、月・日を明記したものについては、改元以前の年号も用いた。なお、外国に関する事項は日本年号を省略した。
 - ② 年・月・日は、太陽暦採用（明治5年12月2日）以前については、太陰暦によるが、幕末維新时期については一部両暦併記したものがある。
 - ③ 南北朝時代の年号は、項目により北朝または南朝の年号を用い、必要に応じて南

朝・北朝の順で両朝の年号を併記した。

- ④ 同一項目内に同世紀の西暦年代が重出する場合は、1000年以降に限り100年以上を省略した。また、同一項目内で日本年号の元号がかわらない場合は、日本年号を省略した。

〔例〕 1616年（元和2）……………26年（寛永3）……………30年……………

- 12 参照項目については、文末に→でその項目を示した。また→〔付録〕は付録参照を、→〔挿図〕は隣接にある図版を示した。

13 参考文献について

- ① 主要な参考文献として、著書・論文・調査報告書などを項目末に掲げた。
② 雑誌論文は、その掲載雑誌名と巻数・号数を（史学雑誌 63—9, 10）のごとく示した。ただし通巻番号によったものもある。
③ のちに単行本に収められた論文は、論文名のあとに書名を記し、単行本の発行年を示した。

【付 録】

- 1 図表をもって示したほうが理解しやすいものを一括して掲げ、「読史備要」として役割をも果たせるように留意した。
2 年代表記については原則として、本文の年代表記に準拠したが、年号が天皇制と不可分であるため、「天皇表」「院政表」「女院表」「摂政・関白・大臣対照表」は、はじめに日本年号を記し、対応する西暦を（ ）内に示した。

【索 引】

- 1 本文項目と解説文中にでてくる事項・人名・地名・書名などを採録した。
2 配列は五十音順により、本文の原則に従った。
3 項目につづく数字は所在ページを、*l*・*r*は左欄・右欄を示し、太字の数字は本文項目として掲げられてあることを示した。
4 項目は、原則として本文の表記により、例えば「憲政擁護運動／護憲運動」「豊臣秀吉／羽柴秀吉」など別称のあるものはそれぞれ項目を立てた。ただし、「後鳥羽上皇」は「後鳥羽天皇」のごとくしたものもある。
5 内容の異なる同一名称には、〔 〕内に違いを示した。

＊ あ ＊

藍 あゐ 濃青色(藍色)の染料を採るために栽培されるタデ科の植物。東南アジア原産で中国を経て、日本へは飛鳥時代にはすでに渡来していたと考えられており、古来染料として重用された。正倉院御物にも藍染めの織物があり、「延喜式」などに藍の貢献等に関する規定が見られる。藍の栽培は、木綿生産が盛んとなる近世に入って本格的に発展し、近世初期の主産地としては山城・摂津・尾張・美濃などが知られ、ついで徳島藩の保護奨励によって阿波藍が全国的に流通した。開港後はインド藍、ついでドイツの化学染料の輸入によって国内藍生産は漸次衰退した。(植田善雄)

IMF あゐふ →国際通貨基金

ILO (国際労働機構) あゐろうどうきこう

International Labour Organization の略称。ベルサイユ条約にもとづき1919年に設立された国際連盟(第2次大戦後は国際連合)の専門機関の一つ。世界の国々から貧困と不正を追放することにより平和の基礎をうちたてることを目的としている。各国の労働立法や労働時間・賃金・労働協約・労働者の保健衛生に関する条約の制定や勧告・指導を行っている。88年現在の加盟国150。日本は設立当初から加盟し、第2次大戦中の中断のち51年(昭和26)再加盟した。つねに常任理事国でありながら、ILO条約の批准数は少なく消極的姿勢が目立つ。各国代表は政府・使用者・労働者から構成されるが、19年設立時に日本政府は労働組合の存在を無視して労働代表を官選したため友愛会・信友会などによる大反対運動が展開された。戦後も第87号条約(結社の自由・団結権条約)を批准しようとしなかったため、58年には総評のILO提訴などの長い闘争により65年によりややく批准されたが、これとともに改正された国内法が新たな制約をもちこむなど問題とされるものも多く残されている。(田中真人)

愛郷塾 あゐきょうじゅく 橘孝三郎が水戸市郊外に創立した私塾。1931年(昭和6)4月15日設立。大正期より長兄・次兄とともに「兄弟村農場」を経営していた橘は、29年には農本主義を唱えて、

近隣農村を中心に愛郷会を結成、さらに31年になって、「兄弟村農場」内に子弟教育のための愛郷塾を設立したが、同時に橘は井上日召を通じて右翼の国家改造運動に接触しており、この塾も右翼運動の一拠点となった。32年の五・一五事件にあたっては、塾生により組織された襲撃班が変電所を襲ったが、さしたる被害を与えられなかった。以後も塾は存続したが、顕著な活動はみられずに終わっている。

→五・一五事件

(古屋哲夫)

愛国公党 あゐこくこうとう 〔1〕日本最初の政党。1873年10月の政変(明治6年政変)後、下野した板垣退助・副島種臣・後藤象二郎・江藤新平らは、民撰議院設立の建白を政府に提出することに決したが、一方民間の世論を喚起することを目的として政党の結成を申し合せ、まず同志集会の場として幸福安全社を東京銀座に設立、これに参加するものを中心に愛国公党を結成。天賦人權論と君民融和を主な内容とする「愛国公党本誓」の署名式は建白書提出の3日前に行われ、前記4名のほか由利公正・小室信夫らが参加した。しかし、建白が容易に政府の受け容れるものでないことを知った板垣らは、地方に基盤を作る必要を痛感し、それぞれ帰郷したため、遅くとも同年4月までには事実上解党したものと思われる。党規約も作られず、党財政の未確立も解党の一因となった。〔2〕1890年(明治23)5月5日大同団結運動の分裂後、板垣退助が組織した政党。大同団結運動は89年3月の後藤象二郎の黒田清隆内閣の通信大臣への入閣を機に、大井憲太郎派の大同協和会(非政社)と河野広中派の大同倶楽部(政社)へと分裂、その後大隈重信の条約改正案反対運動のなかで一時的共同闘争を展開したが、条約改正中止が明らかになるとふたたび対立は激化。板垣は両派の合同を企てたが、自由党再興を図ろうとする大井派とそれに反対する河野派とのあいだにあって、やむなく89年12月板垣は愛国公党結成の決意を表明した。翌90年4月15日各府県常議員を決め、5月5日東京木挽町で結成大会を行ったが、その後から自由党(90年1月21

日大井派が結党)・大同倶楽部・愛国公党の3派合同への準備がすすみ、6月3日合同準備として庚寅倶楽部が組織され、第1回総選挙後9月15日これを母体に立憲自由党が結成された。→自由党、大同団結運動 ④板垣退助：自由党史(1910, 岩波文庫1957)、大津淳一郎：大日本憲政史3(1927)、升味準之輔：日本政党史論(1966) [猪飼隆明]

愛国社 愛国 立志社を中心に組織された日本最初の全国的政党。1875年(明治8)2月22日立志社の板垣退助・片岡健吉らの呼びかけで大阪に集まった同志によって結成された。その「愛国社会議書」で、本部を東京に置き、年2回大会を開くことを申し合わせたが、まもなく解体した。ついで77年末ごろから立志社の同志や越前の杉田定一などにより愛国社再興の準備がすすめられ、翌78年9月11日に大阪で再興大会が開かれた。各地の自由民権運動の発展を反映して、翌年3月の第2回大会には18県21社が参加、同年11月の第3回大会で国会開設願望の請願書の提出が決議され、翌80年3月の第4回大会には2府22県8万7000余人の署名人の総代として114人が参加し、愛国社は国会期成同盟へと発展的に解消された。自由民権運動を地方に広げるとともに、それを全国的に集中させることによって、国会開設運動の発展、自由党結成の基礎を築いた。→国会開設請願運動 ④後藤靖：自由民権運動の展開(1966) [猪飼隆明]

愛国婦人会 愛国 近代の軍人援護のため
の婦人団体(1901.3.2~42.2.2, 明治34~昭和17)。北清事変に慰問使として従軍した奥村五百子が強兵の育成や出征兵士・傷病兵の慰問、軍人遺家族援護を目的に近衛篤磨らを動かし創立。1903年(明治36)以来総裁に皇族妃をあて、日露戦争ころ会員約46万、戦場へ慰問袋を送るなどした。奥村は遊説により軍国主義鼓吹につとめ、大正中期に社会事業にのり出し、満州事変後は婦人報国運動を提唱した。37年(昭和12)ごろ会員338万、国防婦人会とせりあった。42年大政翼賛会の下部組織大日本婦人会に統合された。→奥村五百子、大日本婦人会 ④飛鏑秀一：愛国婦人会四十年史(1941) [山本四郎]

相沢事件 相沢 1935年(昭和10)8月12日、相沢三郎陸軍中佐が白屋陸軍省内で軍務局長永田鉄山少将を斬殺した事件。十月事件後陸軍内部には統制派と皇道派が形成され対立していた。34年3月永田が軍務局長に就任すると、統制派による皇道派への圧迫が強まり、皇道派青年将校の思想に共鳴していた相沢が、永田を殺害

した。青年将校は公判を反統制派宣伝の場として利用し、やがて二・二六事件がおこった。相沢は36年7月3日死刑に処せられた。→皇道派・統制派 [木坂順一郎]

会沢安 会沢 安(1781~1863, 天明1~文久3) 幕末の水戸藩士。名は安、字は伯民、幼名は市五郎、または安吾。号は正志斎、欣賞斎。水戸藩下士の家に生れる。10歳で藤田幽谷に入門、やがて彰考館に入り修史に携わる。1824年(文政7)水戸領内大津浜への英国船来航事件に筆談役として現地へ赴き、それを契機に翌年、尊王攘夷の書「新論」を執筆。29年藩主継嗣をめぐる対立抗争に藤田東湖らと徳川斉昭を擁立して成功。御用調役・彰考館総裁を歴任し、斉昭の下で藩政改革を推進する。40年(天保11)藩校弘道館総裁になる。44年(弘化1)幕命により斉昭が謹慎となると翌年、藩命により禁錮。49年(嘉永2)斉昭赦免とともに禁錮を解かれ55年(安政2)にはふたたび弘道館総裁となる。59年の安政の大獄にて斉昭永蟄居となり、水戸藩への攘夷勅諭返還の幕命の扱いをめぐる、その返納を主張して激派と対立した。藤田東湖とともに後期水戸学を担った代表的人物。著書に「迪彝編」「下学適言」「及門遺範」などがある。→新論 [宮城公子]

相对济令 相对 江戸時代、金公事(金銀貸借関係の訴訟)を幕府は取り上げず、当事者同士で解決することを命じた法令。1661年(寛文1)に初めて出されて以来数度にわたって発令された。この法令は、訴訟増加への対処と旗本層の救済をねらったものであるが、8代将軍徳川吉宗が1719年(享保4)に出した相对济令は、金公事を永年にわたって取り上げないことを宣した。その結果、金融界を混乱に落とし入れたので、29年には廃止された。 [藤井謙治]

朝所 朝所 平安宮の太政官書司の庁の東北隅にあった屋舎。「あしたどころ」「あいたどころ」ともいい、朝食所(処)、朝膳所、朝政所とも表記する。桁行5間梁行2間の身舎の四周に庇を設けた西向きの建物である。列見・定考など太政官における儀式の際に、参議以上の公卿が列席して酒宴の儀を行う場所であった。そのほか臨時の用途、政務にも用いられることがしばしばあった。 [橋本義則]

愛知用水 愛知 木曾川支流王滝川の牧尾ダムから愛知県濃美平野東南部および知多半島南部に至る人工用水路。1951年(昭和26)から計画され、世界銀行からの借款(36億円)とアメリカ

カ余剰農産物の売却資金(700万ドル)を中心として、愛知用水公団により工事が開始され、5年の工期で完成、61年9月通水した。全長約112kmで約30万km²の耕地に恒久的水利施設をつくるとともに、発電・上水道・工業用水の給供をも目的とする第2次大戦後の代表的な用水路である。
〔藤井松一〕

会津塗 あいつ 中世末期以来、福島県会津若松地方で産する漆器。16世紀、領主蘆名氏のと時から生産しており、1590年(天正18)に移封してきた蒲生氏郷が、近江国から木地師、塗師を招いて産業としての基をきずいたという。以後、会津藩の奨励策の下で特産として知られて江戸などへ移出され、19世紀に入るとオランダ人へ販売された。17世紀中期には蒔絵を施すようになるが、消粉蒔絵は独特の技法で、沈金も有名である。製品の種類は膳、碗、盆、重箱など日用品が多様である。
〔高沢裕一〕

アイヌ〔近代〕アイヌは北海道・樺太・千島列島に居住し、のち北海道に集められた。近代に入り内地人(和人)の入植の進捗により主たる生業の漁業は権利を奪われ、強制移住・土地強奪や和人との雑婚で人口も減少した。人口は1877年(明治10)の調査で1万7080人(不確実説あり)。69年アイヌとの協和とその繁殖をはかる右大臣通達や、同年第2代開拓使長官東久世通禧の藩政以来の融和策の継承も、煽動者による反乱を恐れたためといわれる。75年の樺太・千島交換条約で樺太アイヌ841人が故郷の見える宗谷に移住したが、第3代長官黒田清隆はロシア人との折衝を恐れて対露^露に強制移住させ、離散潰滅した。78年アイヌを旧土人と称す。82年開拓使廃止。日胆(日高・胆振^胆)はアイヌ人が多く、白老^白に移住したアイヌは81年明治天皇の巡幸、同地1泊で脚光を浴びた。石狩川本支流沿いに点在したアイヌコタン(村)は85年近文^近に強制移住させられた。道東は和人の入植が進まず、強剛なアイヌが居住したが、入植の進捗とともに衰退、人口も北見80年955人が91年381人となった。教育は92年公布の市町村制を施行せぬ地方の小学校教育規程が北海道は95年施行、アイヌは特殊地域として1901年旧土人児童教育規程を実施。1895年日高アイヌが和人の横暴を陳情に、96年アイヌ総代が土人保護法制定請願に上京した。96年屯田兵を廃止して札幌におかれた第7師団主力が1900年旭川に移転、隣接地の値上りを見越して1898~99年工事関係者や資

本家が旧土人保護法を無視しアイヌを立ち退かせた事件は著名(近文土地問題)、和人のアイヌ観は無知無識無能無芸(1900年の新聞)、議会が開かれても投票権なく、日本語・日本名を強制され、婦女暴行事件も多い。1887年紋別郡上涌別町のナオザネコタンに単身入植した土佐人徳弘正輝はアイヌ女性と結婚、1936年(昭和11)没するまでアイヌを愛護して「コタンの父」と称され、1891年初代北門新報主筆となった中江兆民、同新聞の記者伊東正三らはアイヌの愛護に尽力し、牧師ジョン=パチエラーは教育に尽力し、90年愛隣学校を幌別にて、函館・札幌に及ぼし、英国医師ゴードン=マンローは99年渡道を機にアイヌ語研究をはじめ、1934年風谷に定住して晩年をアイヌ救済に捧げ、「アイヌ博士」小谷全一郎は明治末十数年をアイヌ救済に捧げ、09年首相らに建白した。伊東正三の後援した金成喜蔵(本名カンナリキ、幌別酋長一族)・太郎父子、その一派にユウカラ(アイヌ叙事詩)研究の金成まつ・知里真志保がある。大正末の26年10月、近文アイヌ4名が結党もない日本農民党に加盟、12月白老アイヌの森竹竹市は解平運動を提唱、11月近文アイヌ深沢市太郎は解平社を起した。32年4月旭川市近在部落代表が開墾地削減反対、旧土人保護法撤廃を請願するなど若干解放闘争があり、戦後はアイヌの観光資源化反対の動きがある。(参)高倉新一郎:アイヌ政策史(1972)、佐藤忠雄:新聞にみる北海道の明治大正(1980) 〔山本四郎〕

アウグスチノ会 あうぐすちのゑ Ordo Eremitarum S. Augustini 聖アウグスチノの修道戒律によって創立された諸修道会の総称。17世紀日本で布教したのは1256年に創立されたアウグスチノ隠修士会、略称OSA。1602年(慶長7)に日本に渡来し、豊後・日向地方および長崎を中心に布教活動を行った。長崎には「カリタス(愛)の家」をもち、癩病患者の収容保護活動にも従事した。37年(寛永14)日本人神父トマス=デ=サン=アウグスチノ(金鍔次兵衛)が長崎で殉教し、同会の活動は終息した。〔池内敏〕

葵祭 あおい 京都市北区上賀茂神社(賀茂別雷神^{あおい}神社)、同左京区下鴨神社(賀茂御祖^{あおい}神社)の祭礼。ともに賀茂神をまつる神社であり、賀茂祭ともいう。社伝では欽明朝(「日本書紀」では540~571年)の創立といい、「本朝月令」所引秦氏本系帳にもそのように伝える。しかしこの祭が盛大となるのは8世紀初頭以後で、とりわけ平安京が宮都となって以後は祭日も4月

中西日と定まり、内親王を齋王とする慣例が始まるなどして発展した。現在は新暦に換算して5月15日が祭礼日。なお葵祭の名は葵の葉で社前などを飾るために生じた。→賀茂神社

〔井上満郎〕

亜欧堂田善 あおうどう (1748～1822, 寛延1～文政5)

江戸後期の洋画家・銅版画家。本名の永田善吉を約して田善と号する。名は可大、のち太仲。晩年には如且とも号する。磐城の須賀川誌の紺屋(農具商とも)に生れる。伊勢の月僊、および谷文晁に画を学ぶ。49歳のとき、白河領土松平定信に出仕。長崎に赴きオランダ人に銅版画を学ぶ。銅版で万国図を作り定信に献上。これにより定信から亜欧堂の号を与えられる。江戸風景の連作の銅版画が現存。→銅版画

〔宗政五十緒〕

青木昆陽 あおきこ (1698～1769, 元禄11～明和6)

江戸中期の儒者・物産学者・蘭学の先駆者。名敦書畝、字は厚甫、通称文蔵。昆陽と号した。江戸日本橋小田原町の魚問屋の子として生れる。22歳のとき伊藤東涯の門に入る。2年余ののち江戸に帰り儒学を教授。与力加藤枝直の推薦によって知遇を得た町奉行大岡忠相に、蕃蕃の栽培・貯蔵について説いた「蕃蕃考」を呈出したのが機縁で、1735年(享保20)に薩摩芋御用掛を命ぜられる。また忠相の上申により官庫の書籍の閲読を許され、39年(元文4)には御書物御用達の役につく。42年(寛保2)徳川吉宗の命により「目葉の伝授」をうけるため、参府のオランダ人と通詞を介して対談し、翌年からほとんど毎年のように参府のオランダ人と面談している。「和蘭貨幣考」「和蘭勸酒歌訳」や、「和蘭話訳」「和蘭文訳」「和蘭文字略考」などの語学書を著しており、本格的な西洋学術の移植・研究への道を開いたという点で蘭学発達の先駆者といえる。

〔山崎彰〕

青木周蔵 あおきしゅうぞう (1844～1914, 弘化1～大正3)

明治期の外交官。山口県生れ。長崎で洋学を学び、3カ年ドイツに留学。1873年(明治6)外務一等書記官、74年駐独公使、85年外務次輔、86年次官、89年外相として条約改正交渉に尽力したが天津事件で辞職した。92年以後駐独・駐英公使を兼任し、日英通商航海条約を締結して法権を回復、98年外相に再任、北清事変に対処し、1906年駐米大使として移民問題に独断関与して解任され、枢密顧問官となった。

〔小林幸男〕

青木木米 あおきこめ (1767～1833, 明和4～天保4)

江戸後期の陶芸家・画家。京の縄手通が白川と交差する大和橋辺の茶屋木屋の子として生れる。名は八十八詰、字は佐平または佐兵衛、号は木米のほか青来、古器観、百六散人、豊米、竜米、九々鱗など。10代で高芙蓉に中国古器(銅器、玉、銭貨)などの鑑識を学び、みずから古銭の模鑄を試み、篆刻を行った。30歳のとき、中村芳中の紹介で木村兼葭堂を訪れ、2年前の乾隆59年刊行の「竜威秘書」のなかの朱琰の「陶説」を見て、陶磁製作を生涯の業とすべく決心した。「陶説」は清朝景德鎮の多様な技法を集大成したもの。また雲林院玉文山蔵に陶器を、奥田頼川に磁器を学んだといわれる。頼川は質屋を家業とする文人で、呉須赤絵や古染付など中国風の磁器を焼いて京焼中興のさきがけをなした人で、その門に木米はじめ仁阿弥道八や永楽保全が出て京焼の最盛期を迎える。木米は粟田口小物座町に築窯し、その中国趣味の磁器は煎茶を愛好する文人のあいだに評判となり、1805年(文化2)には粟田口青蓮院の御用窯を拝命し、また紀州へ下って作陶の指導をしたともいう(御庭焼・瑞芝焼)。06年金沢の町年寄亀山鶴山に招かれて春日山窯を開き、07年まで滞在して中断していた九谷焼を再興した。その技法は煎茶器のみならず抹茶器、染焼、朝鮮写、南蛮写と多様である。27年(文政10)「陶説」の序文を頼山陽に依頼したが、刊行は没後2年目の35年(天保6)で、煎茶仲間の二条城在番松平乗義に奉呈する跋文「上奥殿侯書」は自伝である。絵画の制作は文政に入ってからが多く、現存の遺品では代表作「兎道朝嗽図」の描かれた24年58歳のときのものが最も多い。田能村竹田は、木米を評して「其ノ画ハ亦、古窯ノ描ク所ニ出ヅ、故ニ焦墨乾擦シテ演染ヲ用イス、奇致異想ハ自ヲ別趣ヲ具ウ」(「竹田荘師友画録」といっている。22年の「平安人物志」には陶工として載っており、篠崎小竹はその墓碑に「識字陶工」と記している。

〔山岡泰造〕

赤い鳥 あかい 大正・昭和初期の児童雑誌(1918～29, 大正7～昭和4, 一時休刊, 1931～36, 昭和6～11)。巖谷小波(いわたせ)に代表された明治のお伽噺に代り、人間としての子どものための芸術の創造をめざして鈴木三重吉主宰のもとに文壇作家の幅広い協力を得て刊行された。島崎藤村・小川未明・新美南吉(にいしげ)・坪田譲治らの童話や北原白秋・西条八十らの童謡を生み、また山本鼎の自由画・三重吉の綴方・白秋の児童自由詩等の運動の舞台ともなる。→児童文学 〔深江浩〕

赤坂城 あかさか 鎌倉末期、楠木正成が挙兵した城。現大阪府南河内郡千早赤阪村。1331年(元弘1)笠置落城の直後、正成はここに挙兵、「方一ニ町＝ハ過ジ」(「太平記」といわれる小城で、奇計を用いて幕府・六波羅の大軍を支え、正成の存在を天下に示したが、やがてみずから城を焼いて姿を隠した。落城後は、幕軍の湯浅定仏が居城したが、32年末、正成再挙にさいしこれを奪回し、千早城の出兵として部将平野将監に守らせた。しかし水路を断たれてふたたび落城した。城跡は上下に分れ、下赤坂城が、正成最初の挙兵跡といわれている。→元弘の変
(熱田公)

明石原人 あかしげ 兵庫県明石市大久保西八木海岸において、1931年(昭和6)直良信夫が採集した人類左側腰骨をいう。原資料は戦災で焼失したが、石膏型の研究から長谷部言人は48年この人骨を原人のものとし、*Niponanthropus akashiensis*と命名した。化石化程度および出土層位の不明のために、その古さには否定的な見解が多かった。長谷部説が出されたのちに現地調査が組織されたが、その古さを証明する資料は得られずに終わった。
(山中一郎)

赤染衛門 あせが 平安中期の女流歌人。父は赤染時用誦。彼が衛門府の官人であったことから、その名が由来しているといわれている。母はじめ平兼盛に嫁しており、実父は兼盛であるともいわれる。文章道で著名な大江匡衡と結婚し、挙周を産んだ。藤原道長の妻源倫子に仕え、その女彰子(一条天皇皇后)の女房となった。その歌集に「赤染衛門集」があり、「栄華物語」の作者を彼女に擬する説もある。→栄華物語
(佐藤宗諱)

県犬養氏 あかぬい 番犬・獵犬を飼養する犬養部を率いて屯倉や県などの守衛にあたることを本来の職務とする氏族で、神魂命の後裔の神別氏族。カバネはもと連であったが、684年(天武13)宿禰を与えられた。藤原不比等の妻の三千代(光明皇后)の母として後宮に勢力をふるい、広刀自は聖武夫人として、安積親王・井上親王・不破内親王を生み、さらにのちに不破内親王の厭魅が事件に関与した姉女には、764年(天平宝字8)大宿禰が与えられるなど、奈良時代には後宮関係の女性を輩出した。→県犬養三千代
(栄原永達男)

県犬養三千代 あかぬいのみ (?～733, ?～天平5) 奈良時代の女官。中臣東人の子。美努王とのあいだに葛城王(橘諸兄)・佐為王・牟婁女

王をもうけ、ついで藤原不比等と再婚し、701年(大宝1)安宿媛(光明皇后)を生んだ。飛鳥浄御原朝より後宮に出仕し、以後聖武天皇まで歴代の天皇に仕えた。708年(和銅1)元明天皇即位後の大嘗祭において、その忠誠を誉めて橘宿禰の姓を賜った(県犬養橘宿禰三千代)。721年(養老5)、元明太上天皇の重病に際して出家した。その後729年(天平1)光明子の立后によって、皇后の生母として重んぜられたが、733年死亡した。時に内命婦正三位であった。彼女の第1子葛城王は一説に684年(天武13)生れであるので、このとき70歳前後であったと思われる。760年(天平宝字4)夫の藤原不比等が淡海公に封ぜられたとき、正一位大夫人を贈られた。1966～67年(昭和41～42)の藤原宮跡の発掘調査で、彼女の可能性がある「三千代給煮……」と記した木簡が出土している。→橘諸兄、藤原不比等、光明皇后、県犬養氏、橘氏
(栄原永達男)

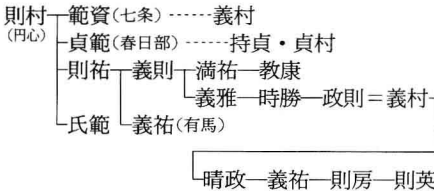
県主 あかぬい →国造

赤旗事件 あかひ 明治後期の社会主義者・無政府主義者弾圧事件。錦旗館事件ともいう。1908年(明治41)6月22日社会主義者山口義三(孤剣)の出獄歓迎会を同志が神田錦旗館で開き、警官に制止されて終了後街頭行進に移り、右派の議会議事者に対する示威として「無政府共産」と白文字をぬいた赤旗をたて、革命歌をうたい、警官に制止されると旗をまき、また翻すなどして15名が逮捕された。当局はこれを大事件にしたて、大杉栄は懲役2年半、堺利彦・山川均らは同2年、荒畑寒村らは1年半の処分をうけた。⑥大河内一男：黎明期の日本労働運動(1952)

(山本四郎)

赤松氏 あかまつ 室町時代播磨の豪族。村上源氏で、鎌倉初期則景が播磨佐用庄の地頭となったというのが確証はない。もと宇野氏を称したらしく、その庶流が赤穂郡赤松村に拠って赤松氏を称した。鎌倉末～南北朝初期に則村が出てにわかに強勢となり、播磨守護。嫡子範資は摂津、次子貞範は美作、3子則祐は家督を継いで播磨・備前守護となった。則祐の子義則は播磨・備前・美作守護となり、幕府の侍所の所司にもなって、四職家のひとつとして重きをなした。しかし、その子満祐は嘉吉の乱を起して没落。弟義雅の孫政則は、南朝の皇胤に奪われた神皇誓回の功によって加賀半国守護として再興を許され、ついで応仁の乱に乗じて播磨・備前・美作守護となり、細川氏与党として活躍し

た。養嗣子義村は両細川の対立に澄元派となったため、高国派の老臣浦上村宗に殺され、以後は名ばかりの守護家となった。則房は羽柴(豊臣)秀吉に属し、阿波板野郡住吉1万石に移封され、その子則英は関ヶ原の戦で西軍に属して滅んだ(則房と則英を同一人とする系図もある)。庶流で播磨鹿野城主であった広秀(斎村広通)は好学で葬首座(藤原惺窩)に師事した。但馬竹田城主となったが、同じく西軍に属して滅んだ。播磨三木城の別所氏も赤松氏庶流。近世大名として存続したのは、摂津有馬郡の分郡守護であった有馬氏だけである。④高坂好；赤松円心・満祐(人物叢書)(1970)、竜野市史編纂専門委員会編；竜野市史1、2(1978、81)、水野恭一郎；守護赤松氏の領国支配と嘉吉の変(史林42-2) (石田善人)



赤松則村 赤松 則村 (1277~1350, 建治3~観応1)

南北朝初期の武将。播磨赤穂郡赤松村を本拠に、鎌倉末期にわかに台頭した悪党的武士らしい、3男権律師則祐が尊雲法親王(還俗して護良親王)の側近であった関係から1332年(正慶1)親王の令旨を受けて挙兵し、摩耶山城(神戸市)で六波羅勢を迎え撃ち、京都攻略軍に加わって大功をたてた。後醍醐天皇の隠岐からの還幸を兵庫で迎えてその先導となり、播磨守護職に任ぜられたが、護良親王派と目されてその失脚と前後して守護職を免ぜられた。その不満から足利尊氏が天皇に叛した当初からこれに属し、尊氏が京都に敗れると再挙を勧めて九州におもむかせ、自分は本拠赤松村の白旗城に籠城して追討の新田義貞軍を阻止した。尊氏が大軍を率いて東上するのを室津に迎え、尊氏・直義兄弟と協力して楠木正成を湊川に破ってこれを戦死させた。尊氏から播磨守護職に任ぜられ、長子範資がは摂津、次子貞範は美作の守護となり、有力守護家赤松氏の基礎を固めた。また、大徳寺開山宗峰妙超(妙超)の母が則村の姉であったためその最初の檀越となり、また、雪村友梅に深く帰依して最初の挙兵地苔縄に法雲寺を建立して開山に招いた。法号は法雲寺殿月潭円心。

④高坂好；赤松円心・満祐(人物叢書)(1970) (石田善人)

赤松満祐 赤松 満祐 (1381~1441, 永徳1~嘉吉1)

室町中期の守護大名。則村の曾孫。父義則の死後家督を継ぎ、播磨・備前・美作3カ国の守護侍所所司を3度歴任した。家督を継いでまもなく將軍足利義持は満祐の本国播磨を召し上げて幕府の料国としその代官に龍臣赤松持貞(則村の2男貞範の孫)を充てようとした。満祐がこれを不満として播磨に下国すると、備前・美作守護をもとり上げようとした。このときは持貞の不義が発覚し、管領畠山満家の仲介もあって事なきを得た。將軍義教は備前・美作守護を赤松貞村(持貞の兄満則の子)に代えるのと噂が立ち、満祐の弟義雅が義教の不興をうけて所領を没収されたので叛意を固め、1441年(嘉吉1)6月24日嫡子教康とはかって義教を京都西洞院二条の自邸に招いて暗殺し、嘉吉の乱を起した。播磨城山部城(揖保郡新宮町)に籠城したが、山名持豊らの追討軍に攻められて自殺した。法名は性具。→嘉吉の乱、足利義教 ④高坂好；赤松円心・満祐(人物叢書)(1970) (石田善人)

秋篠寺 秋篠寺 奈良市秋篠町にある寺院。法相宗・真言宗をへて現在浄土宗西山派。善珠の僧正を開山と伝える。780年(宝龜11)光仁天皇一代をかぎって封100戸が施入され、812年(弘仁3)にも同数が施入された。善珠は早良親王の御堂から安殿皇太子(平城天皇)をまもる修法をおこない、善珠の没後皇太子は善珠の凶像を当寺に安置したという。1135年(保延1)講堂を残して全焼したが、やがて再建され、鎌倉時代には西大寺と寺領用水をめぐる大争論をくり返した。現在は国宝の本堂と重要文化財の伎芸天像および梵天・帝釈天像などがある。

(松原永遠男)

秋田城 秋田 古代における「蝦夷」への出羽側の前進基地として設けられた城柵。現在、秋田市寺内高清水にある城柵跡がその遺跡と考えられる。733年(天平5)それまでの最上川河口の出羽柵(城輪柵および八森遺跡)を北進させてこの地におかれ、秋田城とされ、一時は出羽国府とされたともいわれる。不整形の土塁によって囲まれた内に正庁、脇殿をもった官衙が明らかになっており、天平5年の年紀木簡や漆紙も発見されている。878年(元慶2)に城北の「蝦夷」が反乱を起し、その多くが焼亡した。しかしその後復興され、秋田城は出羽介が常駐して秋田城介とよばれ、武門の栄職とされた。→城柵

④秋田市教育委員会編；秋田城跡(発掘調査概報)(1972~85)

(佐藤宗諒)

秋田藩 秋田 出羽秋田郡に置かれた藩。藩

主佐竹氏。外様大名。居城は久保田(秋田)。表高20万石、内高40万石、19世紀中ごろには実高80万石となる。1601年(慶長6)関ヶ原の戦の戦後処分として、秋田・小野寺氏などにかわり、常陸54万石からの転封によって成立。以降薩藩置県にいたる。数度の検地によって領内支配の基礎を固めるが、知行形態は幕末まで地方知行であった。初期には院内銀山の開発、林政に積極的に取り組んだ。明治維新には、京都側につき、奥羽越列藩同盟に対抗。〔藤井謙治〕

秋月の乱 ㊦㊧ 九州秋月におこった士族反乱(1876.10.26~11.3, 明治9)。旧秋月藩士磯淳・宮崎車之助・今村百八郎ら200余名の士族は、政府の開明政策とくに士族解体政策に反対して熊本神風連の拳兵を機に決起し、豊津方面に兵を進めたが、小倉鎮台兵に奇襲されて敗退。磯・宮崎らは解隊を主張して自害し、今村らは秋月方面に転戦したが、敗北して多くは捕えられた。今村・益田静方は斬罪、19名が除族のうえ懲役、122名が除族に処せられた。〔藤藤靖〕

安居院 ㊦ 中世における唱導㊦の一流派。もと叡山竹林院の京都における里坊㊦で、京都市上京区大宮通寺之内北にあり、藤原通憲(信西)の子澄憲㊦とその子聖覚によって開かれた。澄憲は「四海大唱導、一天名人」と称された雄弁家で、子聖覚も能説名才でこれを継承し、唱導の本宗となった。聖覚の子隆承、憲性の代に2家に分裂、ともに説法の家として活躍した。本宗は隆承・憲実・憲基・憲守・親憲と子孫相次いだ。が、憲基の弟澄俊は天台座主尊雲法親王(護良親王)の執事となり、末弟覚守も唱導家として聞えた。南北朝ころあらわれた安居院作「神道集」は各地の社寺縁起を本地垂迹の立場で述べた書で、安居院派唱導者の作である。応仁の乱で安居院は焼失し、ついに再興されずに廃絶した。〔石田善人〕

芥川竜之介 ㊦㊧ (1892~1927, 明治25~昭和2) 明治・大正期の作家。東京出身。最初新原姓。母発狂のため、母方の伯父芥川家で養育され、のち養子となる。東大英文科卒。第3次、第4次「新思潮」同人。1916年(大正5)「鼻」が夏目漱石の賞賛を受け文壇進出の機縁となる。人間の我執、生の虚しさを見つめる知的な目と苦いユーモア、洗練された文章と整然たる形式をもつ短編の名手であったが、やがて自身の生涯をそのままに見つめるようになり「大導寺信輔の平生」などの自伝的作品を生む。さらにプロレタリア文学台頭のなかでこれに理解を示しつ

つもしだいに不安の色を濃くし、「河童」や遺稿となった「歯車」或阿呆の一生」などを書き自殺した。35年(昭和10)菊池寛は彼の名を記念し、優秀な新人の出現とその活動助長を目的として芥川賞を設定、6カ月毎に審査の上受賞作品を「文芸春秋」誌上に発表することにした。第1回は35年石川達三の「蒼氓」㊦であった。→菊池寛、直木賞 ㊦宮本顕治：敗北の文学(1929)〔深江浩〕

阿久津村小作争議 ㊦㊧ 栃木県塩谷郡阿久津村の全国農民組合支部の小作農が1931年(昭和6)12月小作料5割減を要求したところ、地主側は、日本生産党に援助をたのんで拒否し32年1月6日交渉に赴いた組合書記長を拉致したうえ、支部事務所を占拠した。憤激した全農の支持する全国労農大衆党員は1月9日大挙、武装して反撃、生産党員3名を殺害、10名を傷つけたうえ、事務所を奪回した。ために100余名が検挙された。争議は3月8日調停で小作料3割減で解決した。→小作争議、農民運動 ㊦内務省警保局編：社会運動の状況(1932, 復刻1971)

〔渡部徹〕

悪党 ㊦ 中世においてひろく犯科人・悪人とその一味を指す語。「御成敗式目」に「盜賊・悪党」を所領内に隠しおくことを禁じ、これを守護所に召し渡すよう命じた条項(第32条)がみえる。鎌倉中期の文永・弘安ごろから、荘内および周辺で悪党の横行が盛んになり、荘園領主や幕府守護に反抗して、年貢公事対捍・苅田狼藉・銭貨奪取・路次切塞・荘内乱入押妨・襲撃殺生・住宅放火・使者荘官追却など、荘公・幕府支配に対する反体制的行動を展開した。はじめは土民百姓・土豪・流民らの反逆分子のしわざであったが、やがて荘官・御家人層のなかに悪党がひろがり、血縁地縁で結ばれた党・一揆の勢力に成長、北条徳宗専制をもゆるがすにいたった。元弘の乱に際し後醍醐天皇方に加担した楠木・赤松ら反幕勢力は、それら悪党に支えられていた。また南北朝動乱のなかで、悪党はあるいは南朝あるいは武家方に属して合戦に参加し、国人一揆へと成長して行く。→国一揆 〔戸田芳美〕

悪人正機説 ㊦㊧ 弥陀の本願の正機は悪人であるという説で、親鸞が唱えた。浄土教では、自力修行によって悟りをうることのできない煩惱具足の悪人も弥陀の本願力によって救われるとする思想から悪人往生が説かれたが、親鸞は絶対他力の教えに基づいてこれをさらに徹底させ、悪人を救わんがためにこそ弥陀の本願